

第43話

古河一高を去る



私が転任するとわかってもっともショックを受けたのは ESS の連中であつた。

「センセイ、ほんとうにやめるんですか？」

3月のある日 ESS の特別会合の席で彼らの代表が聞いた。泣きそうな顔であつた。

「やめるんじゃない。転任するんだ」

「おなじことです。ぼくたちにとっては…」

「そりゃ、そうかもしれないな」

「センセイ、どうなるんですか、ぼくたちは？」

「どうもならんさ。きみたちはボクがいなくなっても、あ
いかわらず毎週集まって英語の練習をやるんだ」

「でも、どうしてよいか…」

「教師がいなけりゃ何もできない ESS なら、いまのうち

につぶれちゃったほうがいい」

この表現はちょっときつすぎた。みんなシーンとなり、女生徒は目に涙を浮かべ、ひげづらの男生徒がうらめしそうに私をにらんだ。

「おい、どうしたんだ。みんなげんきを出せよ！ だいじょうぶだよ。ボクがいなくてもやってゆけるように、むこう1年分くらいの練習材料と予定表を書いてきてあげたから…」

何人かの生徒の表情に明るいものが走った。

「ほんとか！ さすが！」

と、おどけ屋をもって自他ともに許すKくんがスットンキョウな声を出し、それをきっかけにしてみんながドッと笑った。

「さあ、げんきを出そうよ」

と代表がみんなの気をさらに引き立てるように言い、何人かが同調してワイワイ言った。しぶしぶながらへやに朗らかな空気がよみがえってきた。私はそれから用意してきたプリントをくばり、これから ESS を運営していく場合の要領をみんなに説明した。会合が終わるころには、みんなさきほどの悲劇的雰囲気はどこに行ってしまったかのような表情をしていた。

会合を終えて職員室にもどってくると、小使いさんがお茶をいれてくれた。

「センセイもたいへんですね」

とそのおばさんが言った。

「ほんとうのことを言うとね…」

と私はしぶいお茶をすすりながら、おぼさんに向かって言った。

「ボクは転任したくなくなってきたよ。ここの生徒たちがかわいくてしかたがないよ。親が子をかかわる気持ちがわかるような気がするんだ。ぼくは、生まれてはじめて、自分以外—自分の親をのぞいて—の人間をたいせつな人と感ずるようになった気がするよ」

おぼさんは何も言わず、すでに^{ひとけ}人気のなくなった職員室の茶道具をかたづけしていた。

「だけど、オレ、やっぱり転任しなくちゃいけないんだろうな」

この小使いさんは、私がまだこの学校の生徒だったころから勤めていたから、生徒としての私もよく知っていた。彼女は職員室を出がけにちょっと立ち止まって言った。

「生徒が成長するように、先生も成長しなくちゃ…ね」

ついにだれもいなくなった職員室で、電気もつけず、私はじっとすわっていた。

修業式の日、私は着任したときとおなじように全校生徒にあいさつした。そのあと、ESSの連中が集まって、センベイとお茶の「盛大な」お別れパーティをひらいてくれた。そして最後に、彼らは、私が教えた Auld Lang Syne (ほたるの光) を声をはりあげて歌った。

「おもしろさ」への警鐘

「先生はずいぶんいろんな職業をおやりになりますね」とよくいわれることがあります。なるほど考えてみると、駅員、理容師、医者、ガイド、ガソリン・スタンドの従業員等々、ならべてみると、まだやっていないのは坊さんとサムライくらいかもしれせん。「以前は、先生のお芝居がおもしろくて番組を見ていたんです」とおっしゃる方さえあります。こういうおことばには、ただ恐縮してしまうばかりです。

「画面がおもしろい」ということには、実はたいへんな伏兵がいます。テレビの画面は、テレビを見ている人に強烈な印象を与えます。ちょうど、英語のべんきょうをしようと思って、アメリカのスリラー映画を見たところ、あまり筋がおもしろいので、ストーリーそのものにひきつけられ、見おわってから、かんじんの英語の方はさっぱりおぼえていなかった、ということがよくあるのと似ています。番組を制作する人は、こういう伏兵には十分注意して、いろいろな角度から「計算された」画面を作るようにするのです。

お芝居のおもしろさは、学習の興味をそそるという意味では必要なことです。しかし、またおもしろすぎて、ことばがおろそかになってはいけません。スキットを第三者的にみる場合はもちろん、ご自分で画面のアメリカ人と対話をなさる時でも、「会話の練習をしているのだ」という意識をお忘れにならぬようご注意ください。